

かゆいところに手が届く！ —多摩・島しょ自治体お役立ち情報—

「かゆいところに手が届く！多摩・島しょ自治体お役立ち情報」は、市町村の職員が日頃の業務で感じている疑問や他の自治体、民間企業などの動向、今さら聞けない行政用語など、知りたいと考えている事項について自治調査会が調査し、問題点や課題などを明らかにすることを目的に実施しています。

子どもたちが自ら行うまちづくりについて

調査部研究員 鬼頭 敦子（町田市派遣）

1. はじめに

みなさんの自治体では、子ども^[1]は政策や制度の決定過程にどの程度関与しているのでしょうか。

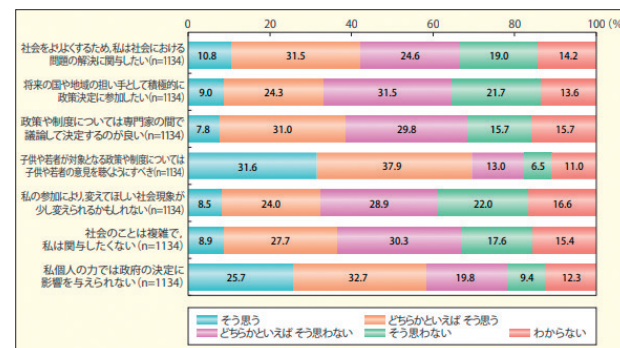
内閣府は、2018年に「我が国の若者の意識と諸外国の若者の意識を比較することにより、我が国の若者の意識の特徴及び問題等を的確に把握し、子供・若者育成支援施策の検討の参考とする」ため、「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を実施しました^[2]。調査結果では、日本の若者は諸外国の若者と比べて政治に対する関心度が最も低いことが明らかとなりました^[3]。

政策決定過程への関与についてみると、日本の若者で、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した者の割合が最も高かったのは、「子供や若者が対象の政策や制度は対象者に意見を聴くようにすべき」の69.5%でした。次いで高かったのは、順に、「私個人の力では政府の決定に影響を与えられない」の58.5%、「社会をよりよくするため、私は社会における問題の解決に関与したい」の42.2%でした。日本の若者は、自分たちが対象となる政策や制度については意見を聴いてほしいと考えているものの、その意見は反映されにくいと考えているようです。

それでは、みなさんの自治体は政策や制度に

ついて考える際、子どもに意見を聴いたり、子どもが問題解決に関与したりする機会をつくることができているのでしょうか。本稿では、特にまちづくりの観点から、基礎自治体が「子どもの意見を聴いている事例」と、「子どもが問題解決に関与している事例」について紹介します。

▼政策決定過程への関与



<出典>令和元年版『子供・若者白書』P13

2. 子どもの意見を聴いている事例

東京都町田市「高校生とのワークショップ」

■幅広い世代の市民と一緒に検討

町田市では、基本構想と基本計画「まちだ未来づくりプラン」が2021年度に計画期間を終えるにあたり、新たな基本構想・基本計画として「（仮称）まちだ未来づくりビジョン2040」を策定することとしました。これまでの反省として、計画が市民に知られていないということがありました。そのため、①市民意識調査、②地区別懇談会（タウンミーティング）、③大学生との

ワークショップ、④外国人市民との懇談会、⑤子育て世帯へのインタビュー、⑥高校生とのワークショップ、⑦無作為抽出型市民ワークショップを行うことで、策定段階から幅広い世代の市民と一緒に検討することとしました。本稿では、「⑥高校生とのワークショップ」について紹介します。

■高校生とのワークショップ開催の経緯

新たに策定する計画では、ゴールを2040年に設定しています。現在15～18歳の世代は、約20年後には社会の中心を担う存在となっているため、この若者世代に「20年後にどのようなまちになっていて欲しいか」を聴く必要があると市は判断し、実施することとなりました。

これまでも、市が2017年度と2019年度に実施した「町田市市民参加型事業評価」で、高校生が事業の評価に参加し意見を述べたことがあります。このように、施策を進める上で「子どもの意見を聴く」ことを重視しているため、高校生とのワークショップもスムーズに開催できたと所管課である企画政策課の担当者は話しています。

■高校生が20年後のまちについて考える

ワークショップは、町田市と一緒に町田の未来を考える若者グループ「町田創造プロジェクト」のメンバーが参加しました。メンバーは、市内在住、在勤、在学の15～18歳（中学生を除く）を条件として広報で募集しています。2019年8月20日に開催した第1回には約20人が参加し、2019年11月1日時点では5回開催しています。

▼メンバーが一面となった広報まちだ

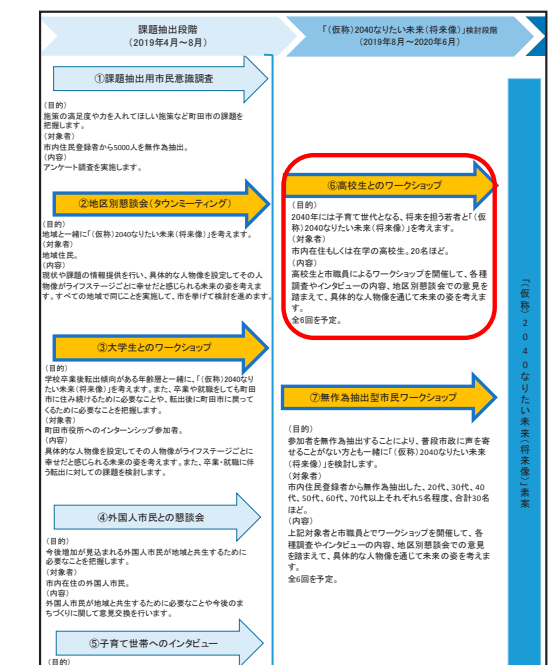


<出典>町田市 HP

https://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/koho/koho/kouhoushi/koho_machida/2019/20190715.files/19-0715-toku-all.pdf（2019年11月25日確認）

ワークショップでは、モデル家族「まちだ家のひとびと^[4]」を構成する様々な人を題材として20年後を考えています。今後、高校生世代が考えた、子ども世代や大人世代にとってのなりた未来の姿として、「（仮称）2040なりた未来（将来像）」素案を作成し、それを元に「（仮称）まちだ未来づくりビジョン2040」を策定する予定です。

▼「（仮称）まちだ未来づくりビジョン2040」の協働検討プロセス



<出典>町田市提供資料を一部抜粋

高校生がまちづくりについて検討することで、他の世代から「高校生ががんばっているのだから自分たちもしっかり考えないといけない」、「自分は生きていないかもしれないが、どのようなまちなら未来の子どもたちが過ごしやすいか考えたい」といった声が出ています。

祖父母世代や親世代の20年後が高校生には想像しにくいことや、毎回同じメンバーが出られるわけではないといった課題もありますが、市は、全ての世代の20年後が大切であるという考えから引き続き検討を進める予定です。

3. 子どもが問題解決に関与している事例

(1) 高知県高知市「こうちこどもファンド」

高知市では、未来の高知市を担う子どもたち